

# 日本漢方協会通信

29年 5月

## 漢方業務指針の改訂作業中

### 漢方業務指針の改訂版に着手

210処方改訂につづいて、薬局製剤・漢方も改訂がされた。それによって薬局製剤も新薬方が掲載されている。日本薬剤師会薬局製剤・漢方委員会では「漢方業務指針」の改訂作業を行っている。薬方解説の部分を委員で分担をしている。一例を示す

### 黄耆桂枝五物湯

薬局製剤指針の成分分量用法用量効能

#### 構成

効果は略す

表虚の代表薬の桂枝湯から甘草を去って黄耆を加えた処方である。別の見方では桂枝加黄耆湯から、甘草を去ったものとも言える。

吉益東洞(1702-1773)の「方極」によれば、急迫な症状がないので甘草を抜いたとある。しかし、原典の桂枝湯・桂枝加黄耆湯のどちらにも麻痺やしびれは書かれていない。

同じく吉益東洞の「薬徴」の黄耆の項の「互考」に身体不仁(知覚鈍麻)は、水毒によっていると書かれている。水毒だとすると甘草を配合しない方が有利になる。

桂皮と黄耆が主薬で、どちらも表の気血が虚しているときに使う生薬である。この場合の麻痺は、表に水がたまって、気血の流れを阻害することにより、抹消の神経が異常を来し起こると考える事ができる。しびれだけでなく、痒みなどにも利用できる。

甘草の副作用に偽アルドステロン症があり、甘草を含む製剤の添付文書に「手足のだるさ、しびれ、つっぱり感やこわばりに加えて、脱力感、筋肉痛があらわれ、徐々に強くなる」と書かれていることから考えても、水毒から来る、しびれや麻痺には甘草がない方がよい。

#### 出典

金匱要略の血痺虚劳編に、「問曰、血痺病、従何得之、師曰、夫尊荣人、骨弱、肌膚盛重、因疲劳汗出、臥不時、動揺加被微風、遂得之、」  
「問うて曰く、血痺の病は何によりて之を得るや、師の曰く、それ尊荣の人骨弱く肌膚盛重、疲労に因り汗出で、臥して不時に動揺し、加うるに微風を被り、遂に之を得る。」  
「血痺、陰陽俱微、寸口関上微、尺中小緊、外證身體不仁、如風痺状、黄耆桂枝五物湯主之。」

「血痺にて、陰の脈(強く押さえた深い脈)も陽の脈(軽くおさえた表面の脈)のともに微(かすかに触れる)である。身体不仁(身体麻)していることは、まるで、風痺状(体が麻痺して痛む病気)のようである」と書かれている。つまり血痺には痛みがないところが風痺とは異なるところとしている。「痺」には「ふさがる」の意味で「血痺」は血がふさがるといふことで麻痺になる。

#### 目標

金匱要略にあるように、「裕福な人は、運動不足のため、骨弱く、ぶよぶよ肥っている。疲れると汗をかきやすく、横になっても、しばしば動揺し、微風であっても被りやすく、遂にこれを得」とある。身体が大柄であるが見かけ倒して体力がない人で、汗をかきやすい人を目標にする。

#### 応用

痛みのないしびれを、拡大解釈し痒みとして湿疹や皮膚炎に使っている。類聚方広義(尾台榕堂(1799-1870))の頭注には、出産婦が風呂に入る毎に皮膚に不快な感じがするのを直したとあり、入浴時、布団に入つてり、発汗後したりしたときに悪化するものに使っている。

金匱要略講話(大塚敬節(1900-1980))には、着物が触るとびりびりし、風呂に入っても湯加減がわからないという人に使ったとある。

同じ所に藤平健先生の話で、風邪の後左目が麻痺して閉じなくなったのをなおしたとある。(2例とも水肥りタイプで汗をかきやすい人であった)

山田光胤先生は「漢方の臨床 60巻 11号」で胃弱で虚証の口内炎・咽頭炎・歯肉炎・舌痛に効果があると書かれている。

#### 鑑別

- 補中益気湯：手足麻痺、消化器弱い、無気力、熱い物を好む。
- 防已黄耆湯：多汗、膝関節痛、下肢の浮腫。
- 黄耆桂枝湯：多汗、疲れやすい。
- 黄耆建中湯：歩行困難、消化器弱い、腹直筋拘攣。